

敏腕社長はベタがお好き

S y u r i & R e n

嘉月葵

Aoi Kaduki

termity



エタニティ文庫

目次

敏腕社長はベタがお好き

5

書き下ろし番外編
過保護な社長ともう一つの約束を

315

敏腕社長はベタが好き

第一話

「朱里さん、少し休憩しませんか？」

昼休みを終えてから数時間、一心不乱にパソコンのキーボードを打ち続けていた高城朱里は、突然聞こえてきた小鳥のさえずりのような可愛らしい声に、びたりとその手を止めた。

顔を上げれば、デスク越しに微笑みかけてくる総務のさやかの姿が目に入る。

男性が八割以上を占める職場で、小動物のような彼女は、朱里にとって数少ない癒しの一つだ。

そんな彼女の笑顔に、朱里の眉間に長いこと居座っていた皺が消失する。

そして考えるまでもなく、誘いにうなずき返した。

「よかった。これ、朱里さんと一緒に食べようと思つて買ってきたんです」

「!! さやかちゃん、それって……」

さやかが手に持っているトレイを覗き込み、朱里はごくりと喉を鳴らした。

同時に、先程まで暗雲の立ち込めていた視界が一気に晴れ渡る。

朱里が「それ」と言ったのは、会社の最寄り駅から二つ先の駅にある有名洋菓子店のほかちやプリンのことだ。そしてそれは朱里にとって、「大」が十個くらい付くほどの好物だった。

「今日は午前中に外出の予定が入っていたので、ランチのついでに買ってきましたんです。前に好きだつて言っていましたよね？」

「うん、ありがと。めっちゃ嬉しいよお」

感激の声を上げ、朱里は飛び跳ねたくなる衝動を抑えて立ち上がると、部屋の隅からこちらを見ていた人物へと向き直った。

「私たちは休憩に入るけど、西野はどうする？」

声を掛けられるとは思つてもみなかったのか、西野と呼ばれた男は、その問いかけにびくっと大きく肩を揺らして立ち上がった。

彼は唯一、朱里が入社当初から仕事を教え込んできた後輩だ。

人はいいが、この上なくおつちよこちよいな西野を、朱里は三年間根気強く指導し続けた。

その結果、ようやく一人前に成長した彼は、今や朱里を師として仰いでいた。

そんな尊敬する朱里の問いかけに、西野は敬礼でもしそうな勢いで声を張った。

「はい、どこまでもお供いたします！」

たかが一緒に休憩を取るくらいで、そんなに張り切らなくても……

恥ずかしい後輩だと朱里が呆れている間に、西野は瞬く間にさやかの手からトレイを奪い取り、休憩室へと突き進んで行った。

そのあまりの勢いに目を丸くした朱里とさやかは、顔を見合わせると同時に、揃ってぶつと噴き出す。

そして目尻にうっすらと浮かぶ涙を指で弾きながら、彼の後を追って休憩室へと向かった。

「ん、さいこお」

休憩室のソファに座るや否や、朱里はかぼちゃプリンを手に取った。次いでほくほく顔でそれを頬張ると、顔中の筋肉をこれでもかというほど緩ませた。

先程まで鬼神さながらの形相で仕事に打ち込んでいた朱里が、一転して無邪気な笑みを浮かべている。その様子を、向かいのソファに座ったさやかは聖母のような微笑みで見守っていた。

一方、さよかの隣に座る西野はぼかんと口を開けたまま、まじまじと朱里の顔を見つめた。

「何よ、人の顔をジロジロ見て。西野、あんた私に喧嘩を売るつもり？」

それなら倍返しにしてやる、と言わんばかりに睨みつける。すると西野は途端に視線を外し、顔の前で両手をぶんぶんと左右に振って否定した。

「すっ、すみません。別に悪気があって見ていたわけじゃなくて……」

慌てて言い訳する西野を、朱里はふんつと鼻であしらう。そしてすぐに気を取り直し、目の前のプリンに全神経を集中させた。

「ご馳走様でした。おかげで元気が出たわ」

プリンを食べ終えた朱里が満足げに告げると、さやかは嬉しそうに微笑んだ。

「それは良かったです。あのまま仕事を続けていたら、倒れちゃうんじゃないかって心配していたんです」

さよかの言葉に、待ってましたと言わんばかりに西野も口を開く。

「俺たち、本当に朱里さんには感謝しているんです。不在にしている社長の分の仕事を一手に引き受けてくれて……。寝る間も惜しんで働いているって知って、皆心配しています」

「私のは、ただの性分だからね」

西野の気遣いに、朱里は困ったような表情を見せた。

朱里の勤める「加賀ホーム」は、関東で五本の指に入るハウスメーカーだ。

小さな工務店からスタートし、一代で大手のハウスメーカーへと会社を成長させたのは、現社長の加賀義文の手腕によるところが大きい。その成功の裏で、彼は寝る間も惜しんで働き続けてきた。

十代から身体を酷使してきた結果、加賀は六十歳という若さで治療困難な病に侵され――

今から一ヶ月ほど前、自宅で出勤の準備をしている最中に倒れてしまった。そしてそのまま病院に緊急搬送され、以来、今もまだ病院のベッドで深い眠りにについている。

それからというもの、西野が話す通り、社長秘書という名の社内の何でも屋を務める朱里にとって、寝る暇もない日々が始まったのだ。

「頑張っているのは、皆も一緒でしょう?」

「俺たちは自分の仕事をしているだけです。けど、朱里さんはそれこそ、営業、技術、総務や経理に至るまで、すべての部署と連携を取ってトラブルを回避して。本当にすごいですよ」

自分が仕事に打ち込んだ理由は、社長の加賀に対する尊敬の念が強かったことと、加賀が不在の時でも会社を回すことができるように鍛えられてきたからで、感心されるようなことではない。

そう思いながら、朱里は返答に困って苦笑する。

朱里の両親は典型的な仕事中毒で、飲食店の再建コンサルタントを生業としていた。

母は朱里を出産して三ヶ月後には仕事に復帰し、朱里が物心つく頃にはもう、家に両親がいないのが当たり前になっていた。

数人の家政婦が交代で二十四時間家に常駐していたため、生活面で不便を感じたことは一度もない。

両親とはテレビ電話で毎日顔を合わせていたし、二人の愛情を疑うようなこともなかった。もちろん、自分を不幸だと思ったこともない。

ただ、朱里にとって両親とは頼りたい時に傍にいない存在であり、頼ってはいけない存在だった。

そんな生い立ち故に、自立心が強くなったのか。高校一年の夏、アメリカ留学を決意して単身で渡米した。

そして大海原に出て世の中の厳しさを知ったことで、国内外の仕事で成功を収める両親を尊敬する気持ちが段々と育っていった。

とはいえ、自分が育ったのが普通の家庭ではないという引け目や、孤独感といったものが常に胸の片隅にはあったのだと今になって思う。

加賀ホームに入社してから、加賀や社員らが惜しみなく与えてくれる安らぎや思いやり。そういった温かな思いは、朱里の心に深く浸透していった。

だからこそ、家族同然の皆のために頑張ることに、偉いもすごいもないだろうと思う。

そんな朱里に向けて、西野は害虫を噛み潰したような表情で続けた。

「それにあの男のせいで、本来なら有り得ないはずのトラブル対応までしなくちゃならなくて」

「確かにあの馬鹿ジュニアはね……」

西野が憎しみを込めてあの男と言ったのは、加賀の一人息子である五十嵐亮のことだ。

加賀が倒れたことよって現れた彼のせいで、朱里は会社全盛期の加賀以上の激務を強いられることとなった。

一人息子とはいっても、亮が物心つく前に加賀は離婚しており、彼は妻側に引き取られていた。そして大人になった亮は、顔の作りも性格も頭の中身も、加賀にはまったく似ていなかった。

遺伝子の力でもう少し何とかならなかったのかというのが、朱里を含めた社員らの総意だ。

彼は父親の入院を聞きつけるや否や、自分こそが次期社長だと言わんばかりに突然会社に姿を現したのだ。

専務の黒田に聞いた話によれば、亮は以前にも似たような行動を起こしていたそうだ。ネームバリューがないに等しい私立大学の建築学科を卒業した直後、会社に現れ、「こ

の会社を継いでやる」と宣言し、温厚で知られる加賀を激怒させたのだという。

これまで父親の責務として金銭的なフォローはしてきたものの、それと仕事とはあくまでも別の話だ。

加賀は、朱里を始めとする社員を心から信頼していた。そんな男が、血の繋がりだけを頼りに息子を後継者に指名するはずもない。

しかし、亮は甚だしいまでに自分勝手に、一度追い返されたくらいではまったく反省しなかったようだ。

我が物顔で会社に居座り始めた彼を、誰もが摘まみ出したいと思った。けれど加賀の意識がない状態とあっては、たかが血縁ごとくと切って捨てるわけにもいかない。

法律上、彼が会社株式の半分の相続権を持っているのは紛れもない事実なのだから。

それ故、社員らが口出しできないのをいいことに、馬鹿ジュニアは愚行を重ねていった。他社を訪問する際に無理やりついてきて、無礼な態度を取ることもあれば、何の権限もないのに、有り得ない価格で受注を請け負う口約束をしてきて、社員が平謝りしなければならぬ事態もあった。

朱里たちは次から次へと舞い込んでくる馬鹿ジュニアトラブルの後始末に追われ、それは今や日常業務に支障をきたすまでになっていた。

「あいつ、絶対に友達なんて一人もいませんよ！」

拳を震わせて言い切った西野の言葉に、朱里は思わず声を出して笑った。

「まあ、愚痴を言っついても始まらないし。毎日を頑張つて乗り切るしかないでしょう」
 なだめるような口調で話を締めると、それまで黙っていたさやかが口を開いた。

「無理はしないでくださいね」

眉尻を下げて心配そうに言うさやかに、朱里はうなずき返した。

「了解です。住宅展示場の新設の件と、得意先との調整はあらかじめ片付いたから、少しは楽になると思うし」

「とにかく朱里さん、俺にできることがあつたら何でも言つて下さい。朱里さんのような美人は笑顔でいてくれた方が、皆も仕事がはかどるはずですから」

「あんたはいつも一言余計よね」

拳を握つて言い放つ西野の前に、朱里は深い溜息を吐いた。

罰当たりなことではあるが、そもそも朱里は美人と称されることが好きではなかった。

目が大きく、鼻も高め。

栗色のストレートヘアは染めているのではなく完全なる天然物で、身長は一六四センチ。

ボディラインは出るところはきちんと出て凹むべきところはしっかり凹んでいるという、ある意味、日本人女性が理想とする容姿を持ち合わせていた。

しかし高校一年から二十歳までをアメリカで過ごし、向こうで桁外れの美人を目にした経験がある身としては、自分の容姿を評価されても何かの罨かお世辞にしか聞こえなかった。

とはいえ、西野が小賢しさも器用さも持ち合わせていないことはよくわかっている。

元氣付けようとする彼の気持ちを受け取り、朱里はやりわりと微笑んだ。

「でも、ありがとう。頼りにしているわ」

そう言いながら肩をぽんつと叩けば、西野の表情は途端に明るくなり、朱里は噴き出しそうになるのを必死で堪えた。

そしてさやかの入れてくれた紅茶を飲み干し、そろそろ仕事に戻ろうかと壁掛け時計に視線を向けたその時――

突然、背後からばたんつという大きな物音が鳴り響いた。

三人が同時にびくつとしながら出入り口の方を振り返れば、いつの間に集まったのか、ドアの向こうから大勢の社員たちが顔を覗かせていた。

「嬢ちゃん、頼るなら西野の坊主じゃなくてもまずは俺たちだろ？ 嬢ちゃんが無理をして倒れでもしたら、それこそ社長に顔向けできなくなっちゃうからな」

そう言いながら、先陣を切つて休憩室に足を踏み入れたのは、一番の古株である工藤だ。いつから立ち聞きしていたんですか？ っていうか、工藤さん。いい加減二十代なか

ばを過ぎた女を嬢ちゃん呼ばわりするのはやめてくださいよ」

呆れたような物言いで返すも、彼らの表情からは自分を心配してくれていることが痛い程に伝わって来た。

「まあ、そう言うなって。俺たちだって、嬢ちゃんのことには自分の娘みてえに可愛いんだ。だからよ、冗談抜きで辛くなったらすぐに言ってくれよ」

「工藤さん……」

うしろで「そうです、その通りです」と拳を握り締めている西野は正直鬱陶しい。けれど工藤とその言葉にうなずいている社員たちに、朱里は心から感謝した。

だが、朱里が彼らの思いやりに瞳を潤ませた直後、工藤は神妙な面持ちを一転させ、何かを企んでいるような笑みに変えた。

「ということだ。今夜は嬢ちゃんの労をねぎらうために、ぱーっといくとしようぜ！」

唐突に、工藤が体育会系のノリも甚だしい掛け声を上げる。直後、一斉に「おーっ」という賛同の声を返すのは、無類の酒好き連中。

さっきの私の感動を返せっ！

彼らのはしゃぎっぷりに、朱里はそう叫びたくなるのを堪えながら、がっくりと肩を落とす。

そして飲み会の計画を立てる同僚たちを眺めていると、同じように彼らを見つめてい

たさやかがぼつりとつぶやいた。

「やっと、いつもの職場の雰囲気になってきましたね」

何気なく発せられた言葉に、朱里ははっと目を見開いた。

いつも活気に溢れて賑やかだった職場が、加賀が倒れてからというものの、驚くほど静かだったことに、今さらながらに気が付いた。

「そうだよ。これこそ、加賀ホームだよ」

つぶやきながら、朱里はふっと優しい眼差しで皆を見渡す。

苦しみを悲しみも悔しさも、共有できる仲間がいるのは幸せなことだ。

単独プレイ専門だった自分に、こんな温かい場所を与えてくれたのは加賀だ。そんな彼に心から感謝しながら、朱里は願わずにはいられなかった。

もう一度、この温かい輪の中で笑う加賀社長の姿が見たいと――

しかし、この三日後。その願いも空しく、朱里や社員らが尊敬してやまない加賀はこの世を去る。そしてそのことによって自分の生活が一変することになるとは、この時の朱里はまだ知る由もなかった。

第二話

加賀の葬儀がしめやかに執り行われた後、息を吐く暇もなく役員会の招集がかかった。新たな代表取締役の選任や、今後の経営方針の決定をする必要が出てきたのだ。

加賀の生前、朱里は議事録作成のためなどで役員会に出席していた。そのため、この日もその場に居合わせることを許可された。

朱里は加賀の妻である洋子の隣に座ると、役員会の開始時刻をじっと黙って待っていた。

そして大方の席が埋まる頃――

この場に似つかわしくない、にやついた顔で入室してきたのは、馬鹿ジュニアこと五十嵐亮だった。

彼はこの日も何食わぬ顔をして、加賀が生前に座っていた席へと腰掛ける。

実の父親が亡くなつたにもかかわらず、馬鹿ジュニアの顔には薄い笑みが浮かんでいた。それを一瞥すると、朱里はそれ以上彼を視界に入れるのを拒否した。

ちらりと隣に視線を移せば、苦笑いを浮かべて自分を見る洋子の視線に気付く。

洋子は加賀の後妻で、元妻との離婚後に加賀ホームの総務に入社してきた女性だ。

当時、仕事と壊れた家庭への事後処理で心身ともに疲れて果てていた加賀を癒し、彼の公私を支え続けてきたのが洋子である。朱里にとっても彼女は母親のような存在だった。

そんな洋子のどこか寂しさの残る表情を見て、つい先日のが脳裏を過る。

「義文さんは幸せ者ね」

加賀の葬儀で朱里や社員らが涙を流す中、気丈に微笑んだ洋子の姿は美しく凛としていた。その時の彼女の姿を、この先決して忘れることはないだろうと朱里は思う。

人に優しく、人を幸せにしてきた社長だったからこそ、亡くなってからも愛される。過去形ではなく、今もこれからもずっと彼を愛し続けるであろう洋子を前に、朱里は

決意を新たにした。

絶対に馬鹿ジュニアを会社の経営に関わらせてはならないと――

そのために何ができるだろうかと思いを巡らせていた朱里の耳に、不意にこつこつと通路に響く靴音が聞こえてきた。

しかし、役員会に招集された者たちはすでに会議室に出揃っている。

では、ここに向かってくる靴音の主は誰だろうか？ 不思議に思っただけで顔を上げると、それとほぼ同時に会議室の扉が開かれた。

姿を現したのは、仕立てのいいスーツを着た規格外のイケメン二人。

「失礼します」

軽く頭を下げてから、堂々と会議室に足を踏み入れる。その姿は、統率者の威厳のよ
うなものを感じさせた。

二人の内、前を行く男の姿には見覚えがあり、朱里は「あつ」と小さくつぶやいた。

一九〇センチ近い長身で、すらりと伸びた手足。

切れ長の目に、きつちりと筋が通った鼻。

それらが絶妙に配置されたイケメンは、何度もマスメディアに取り上げられたことがある人物だ。朱里が最近目にした雑誌にも、彼のインタビュー記事が掲載されていた。

相良都市開発の社長であり、建築業界の若き貴公子と称される、相良蓮。

そんな彼に続いて入室したこれまたインテリ眼鏡のイケメンの襟には、弁護士バッジが輝いている。周囲の視線を釘付けにした二人は無言のまま、空いている席に腰を下ろした。

役員会の開始時刻まで、残りあと十分。

何か大きな変革が起こる予感が部屋中に漂っていた。

「相変わらずのイケメンね。どう？ 朱里ちゃんもああいふ感じが好み？」

事情を知る様子の洋子に問いかけられ、朱里は間髪をいれずに否定で返した。

「いえ、まったく」

「あら、そうなの？ それは残念ね」

何が残念なのかは不明だが、その何かは知らない方がいいような気がして、朱里はあ
えて問い返さなかった。

洋子の言ったイケメンという言葉を否定する余地はないが、あの二人が好みかと問わ
れば答えは否。

一度近寄ろうとしたが最後、大火傷決定だ。

しがない一般庶民は遠くから眺めて、さつさと忘れてしまいうに限る。

彼らをばつさりと切り捨てた朱里の言葉に、洋子は隣で愉快そうに笑い出す。しかし
朱里にはそれを気にする余裕はなかった。

蓮の射抜くような視線が、真つすぐに自分へと向けられていたからだ。

もちろん、先ほどの洋子との小声でのやり取りが、遠く離れた席にいる彼の耳に入っ
ているはずはない。

だが、他に彼の視線の理由に思い当たる節などなく、今すぐにこの場から逃げ出した
くなるような危機感を覚えた。

しかし、なぜか身体は身じろぎ一つできない状態で、しばらく蓮と見つめ合うような
格好となってしまう――

誰か助けてっ!

心の中でそう絶叫する朱里を救ったのは、蓮と共に現れた弁護士だった。

「時間になりましたので、始めさせていただきます。私は弁護士あかざぶの赤坂と申します。先
日お亡くなりになられた加賀義文社長より、生前遺言ゆいごんの作成を依頼されておりまして。
今日この場で、その内容を発表させていただきます」

赤坂の言葉に、会議室内が一気にざわめき出す。

その中で、朱里は冷静に周囲の様子をざっと見回した。

洋子と専務の黒田、そして数名いる常務の中で加賀に近い者たちは事前に事情を知っていたのだろう。

皆一様に涼しい顔で赤坂の話を聞いている。

一方、馬鹿ジュニアこと五十嵐亮と、彼が後継者になると見込んで胡麻ごまを播まっていた
二、三名の役員は、わかりやすい程に顔色を変えた。

そんな中、赤坂は淡々と遺言の内容を話し始めた。

「会社の経営権と人事権は、こちらの相良都市開発の代表取締役である相良蓮に一任さ
れます。加賀社長の後任に関しては、後日彼が選任した者が就任し、役員人事は次期決
算まで現状を維持。社員の勤務体系も、同条件下で継続となります」

加賀は末期の胃癌で、病気が発覚してから亡くなるまでは半年程しかなかったはずだ。

その短い時間の中で自分の死を受け入れ、遺言書を作成し、遺される者たちのことを
思った加賀義文という男の偉大さに、朱里は肩を震わせる。

隣に座る洋子は、赤坂の言葉を聞きながら誇らしげに微笑んでいた。

遺言の内容を聞き終えると、目頭を押さえる者が何人もいた。そんな中、赤坂は役目
を終えたとはかりに着席し、蓮に後を託すように視線を向けたのだが――

「おいっ！ それじゃあ俺はどうなる!？」

直後、慌てた様子で声を張り上げたのは馬鹿ジュニアだった。

「俺には正当な相続権がある。親父の財産の半分は俺のものだ。その俺が会社の社長に
も役員にもなれないなんてことは有り得ないだろう!」

怒りに身を任せて叫ぶ声が、会議室に響き渡る。

負け犬の遠吠えだと朱里は心の中で吐き捨てるが、彼の言い分もわからなくはない。

いくら遺言書で彼の相続財産をゼロとしたところで、加賀の実の息子である彼には、
加賀の財産の四分の一を相続する権利は残る。

だが、亮にとっては希望であり、他の者たちには懸念けんねんである事実を、赤坂は即刻否定
した。

「五十嵐亮様に関しましては、一部口座の預貯金が相続財産として指定されています。

ですが、生前加賀社長に請求していた過分の資金援助、ご自宅の建築資金などが遺産の

前渡しとみなされるため、それ以外に相続財産はありません」

「何だどっ！」

きっぱりと言いつけると、赤坂はそれらの概算をまとめた書類を亮の前へと差し出した。しかし亮はその書類に目を通すことなく、怒りで顔を真っ赤に染め上げながら紙を握り潰した。それからばんつとテーブルを勢いよく叩いて立ち上がる。

だが、いくらわめき散らした所で相手は法律の専門家。

遺言書の内容は、文句のつけようがないものだった。

天誅っ！

朱里はぐっと拳を握りしめ、心の中で絶叫した。

どうしても諦めが付かない様子の亮は、しばらくその場で赤坂や父親を罵倒していたのだが、数分後、会議室に呼ばれた二人の警備員に両腕を抱えられ、強制退去と相成った。これでもう、嫌悪感さえ込み上げてくる男の顔を二度と見ることはないだろう。

そう確信しながら、朱里はようやく溜飲を下げた。

そして再び静寂を取り戻した会議室で、今度は蓮がゆっくりと立ち上がって一礼した。「赤坂弁護士からご紹介いただきました、相良都市開発の代表取締役を務めております相良蓮です。生前、加賀社長には大変お世話になりました」

形の良い薄い唇から、老若男女を問わず聞き惚れるであろうバリトンボイスが発せられる。するとその場にいた者たちは一斉に彼の言葉に耳を傾けた。「この度、私が重要な役目を担うことになり、不安を感じている方もいらっしゃると思います。ですが、洋子夫人や皆様にご協力いただき、有能な人材を代表取締役に推薦させていただきます。また弊社からの人材提供や業務提携も考えておりますので、どうぞよろしく願います」

一昔前に流行った三高と呼ばれる基準を、軽々飛び越えるような男。そんな彼を見つめながら、朱里は惚れ惚れするどころか、ぼかんとした表情を浮かべていた。この人、いっそ政界に進出してみればいいのに……

類稀なるカリスマ性で、あつという間に総理大臣の座に収まり、支持率八十パーセント以上を維持できるのではないかとさえ思えた。

だが、朱里がぼうつとしていられたのはそこまでだった。蓮がゆっくりと視線を移しながら、予想だにできなかった言葉を口にしたのだ。

「それともう一つ。私が信頼する者を加賀ホームの代表取締役として推薦する代わりに、こちらの社の優秀な人材を一人、我が社に引き抜くことを加賀社長と約束しました」

その言葉に、朱里の全身に嫌な予感が駆け巡った。

人材トレードの話をする蓮が、なぜ自分から一ミリも目を逸らさないのか。

まさかと思つて隣に視線を向ければ、いたずらが成功した子供のような笑みを浮かべ

ている洋子の表情が目に入る。その瞬間、朱里は胸の前で十字を切りたいような衝動に駆られた。「ということ、高城朱里。お前には、週明けから相良都市開発の社員として働いてもらう」

つい先程までの丁寧な口調は、幻聴だったのか。

いきなりの命令口調と共に黒い笑みを向けられ、朱里はくらりとした。

同時に、蓮の宣言を聞いた洋子を除く役員の本とんどがざわめき出す。

肩書こそ社長秘書だが、加賀の不在という未曾有の事態を乗り切ってこられたのは朱里の統率力のおかげだ。そのことをこの場の誰も知っているからこそ、彼女を引き抜かれては今後の業務に支障が出ると、役員たちは青睞めた。

新社長が外部から選任されるのであれば、余計に社内の実情を把握している人材が必要不可欠。

しかし、それを考えなかったはずのない加賀と洋子が承認したのであれば、決定は覆らないだろうと判断できる程度には、朱里は物分かりのいい方だった。

急な異動を告げられても動じない朱里を見下ろし、蓮は愉快そうに片眉を上げた。

「質問があれば受け付けるが？」

別ありませんと答えようとした朱里は、寸前でその言葉を呑み込んだ。

こいつ、間違ひなく私に喧嘩を売っている。

蓮の言動から、即座にそんな推測を導き出す。その結果、朱里は「売られた喧嘩は倍にして返す」という自らの掟に従った。

「あなたのおっしゃりやうだと、私には基本的人権である職業選択の自由はないということですか？」

「憲法を引き合いに出すとは面白いな。だが、これは強制じゃない。お前には選択肢が与えられている」

「それはぜひ、詳しくお聞かせ願いたいですね」

挑発するような口調で問えば、蓮はあからさまに黒い笑みを浮かべて答えた。

「我が社に異動する以外に、加賀ホームの代表取締役就任するという選択肢がある。大した理由もなく、そのどちらも嫌だというのなら、俺は今後一切加賀ホームの経営に力を貸すつもりはない」

そんなに極端かつ範囲の狭すぎる選択肢なんぞあるかつ！

今すぐ高級シャツの襟とネクタイを締め上げて、端整な顔を思いつきりがくがくと揺らしてやりたい。そう思ったが、今後のことを考えて朱里は懸命に耐え抜いた。

「自分の器ぐらひは把握しています。私に加賀ホームの社長は務まりません。そして加賀ホームの業績維持には、あなたの存在が欠かせないでしょう」

初めから選択肢などないも同然だと白旗を上げる朱里を、蓮は満足げな表情で見下ろした。

「では、何の問題もないな」

「あるとすれば、私があなたの会社ではド素人同然ということくらいでしょうか。過度の期待をされても、応えられない可能性が多分にあるかと」

これから自分の上司となる男、しかも社長という肩書の相手に投げかける言葉ではないと重々承知の上で、朱里は挑戦的に言い放つ。

自分が無能だとは思わないが、特段優秀だとは思っていない。

加賀の采配と、自分を温かく受け入れてくれた社員たち。それらがあつてこそ、努力も成長もできたのであつて、相良都市開発に場所を移しても同じようにできるとは微塵も思っていないかつた。

自分の意見を臆することなく告げる朱里に、蓮は目を細めた。

「お前の能力を判断するのは、お前じゃない。お前の能力を活かせる場合は、俺が用意する。それにたとえド素人だったとしても、玄人になるまでみっちり仕込んでやるから心配するな」

物騒な発言は、調教宣言にしか聞こえず……

もはや朱里にとって目の前のイケメンは、ただのドS、いや鬼畜にしか見えなくなつ

ていた。

どうやらそう思ったのは朱里だけではないようで、先程まで惚れ惚れした表情で蓮の話聞いていた役員たちも、皆一様に驚きを隠せない表情をみせている。

彼らの視線が集まる中、朱里は額に手を当てると、気を落ちつけるためにふうつと息を吐いた。

「わかりました。ただし、就業規則や雇用条件に関する書類にきっちり目を通した上で、最終的な判断をさせていただきます。法に触れるような内容がほんの少しでも記載されていれば、さすがに加賀社長との約束も無効になるでしょうから」

最後の最後に皮肉混じりの攻撃を仕掛けてみる。すると鬼畜といえども少しはダメージを受けたようで、蓮は一瞬目を大きく見開き、その表情をだんだんと苦々しいものに変えていった。

朱里は彼の表情の変化を目に焼き付けながら、机の下で小さくガッツポーズを決めた。

第三話

「くくくく」

「笑いすぎだ」

加賀ホーム本社ビル内の休憩室で、蓮は缶コーヒを片手に赤坂と時間を潰していた。役員会が終了した後、加賀ホーム側で用意するという食事の誘いを断り、外で軽く昼食を取った二人が再び戻ってきた理由はただ一つ。

もうすぐ昼休憩を終えるであろう朱里に、今後のことを説明するためだ。

休憩時間が終わるのを待つ間、先程の役員会での蓮と朱里のやりとりを蒸し返しては、赤坂が身を振りながら笑い続けている。

蓮は顔を歪め、今にも床に這いつくばりそうになっている赤坂の膝目掛けて、黒光りする革靴の先端をこつりと当てた。

「さすが、加賀社長の秘蔵っ子。大物だよ」

目尻に溜まった涙をぬぐう赤坂は、嘔みつかんばかりの勢いで蓮に対峙する朱里の姿を思い出しているようだ。

狙った獲物は百発百中。

いや、狙わなくても女は掃いて捨てるほど擦り寄ってくる蓮に見惚れるどころか、興味ありませんオーラ全開で威嚇してくる女なんて、そうはいない逸材だ、などと言う。

さらには、赤坂はあの場面を脳裏でリピートするだけで、あと一年は余裕で笑える気がする」とさえぬかした。

そんな友人の態度が、蓮の不機嫌さをますます煽る。

「能力は加賀社長のお墨付きで、度胸は完璧。男はルックス主義じゃないって、蓮の下で働くのには最高の条件だよなあ」

意味深な笑みを浮かべながら肘で脇腹を突いてくる赤坂に、蓮は無言を貫く。

初めから返事は期待していなかったのか、赤坂はさらに続けて語りかけた。

「それにしても、初対面の相手に蓮があんな風にな風を出すのは珍しいいな」

「これから仕事で腐るほど顔を合わせることになるんだ。最初だけ取り繕ったところで、どうにもならないだろう」

吐き捨てるように返す蓮に、赤坂はさらに笑みを深めた。

「へえ、これから腐るほど顔を合わせるつもりなんだ？」

「……………」

赤坂の問いかけに、蓮はまるで誘導尋問に引かかった心境で小さく舌打ちをした。

「あれ？ 黙秘権の行使？ 彼女には拒否権も選択権も与えなかったのに？」

「お前、いい加減に……………」

「ああ、ごめんごめん」

怒りをあらわにし始めた蓮に、赤坂は絶妙なタイミングで降参するように手を上げる。もちろん、彼の表情には反省の色など微塵も浮かんでおらず……………

「何はともあれ、彼女の言う通り法に触れることはするなよ？ さすがにお前の弁護士法廷に立つのはごめんだからな」

「んなことするか！」

「いやあ、お前のもとで彼女が働き始めたなら、笑いすぎて俺の寿命は確実に縮まるよな。笑い死になんてしたら、絶対新聞沙汰になるだろうなあ」

「いっそさっさと死んでくれ」

自分をいじって遊ぶのをやめない赤坂の前に、蓮は深い溜息を吐いた。

わずかに残った缶コーヒを飲み干してちらりと腕時計に視線を送れば、昼休憩の終了まで残り十五分程度となっていた。

話し合いの時間が間近に迫り、蓮はこの後、朱里とどう穏便おんべんに話し合うかの算段を始める。

「加賀さん、あなたの娘の取り扱いは一筋縄では行かないようです」

そうつぶやきながら、蓮は自分に朱里を託した男との約束を思い起こした。

あれは半年ほど前。蓮はある商業ビルの三階にある、赤坂弁護士事務所のドアをくぐった。次いでカウンター越しに頭を下げる所員の女性に声を掛け、慣れた様子で奥の応接室へと向かって行く。

軽くドアをノックして入室すると、彼の親友でありこの事務所の所長でもある赤坂と、加賀ホームの社長である加賀義文が、同時に蓮の方を振り返った。

「相良君、急に呼び立ててすまなかつたね」

蓮の姿を視界に捉えるとすぐに加賀は立ち上がり、軽く一礼をした。

会社の規模は相良都市開発の方が大きいとはいえ、二回り以上年下の相手にも礼儀正しく接する加賀に、蓮は以前から好感を持っていた。

「いえ。たまには私が社を出まさんと、社員たちも肩の力を抜けないでしようから」

冗談まじりに言えば、加賀は目尻に深い皺しわを作った。

「社員が優秀であれば、社長なんて肩書の者はお飾りで済むからね。最近、私もずいぶんと楽をさせてもらっているよ」

向かいのソファに座るように促され、蓮は加賀の正面に腰を下ろした。

「蓮、早速だがこれに目を通してくれ」

着席するとすぐに、隣に座る赤坂から一枚のクリアファイルを手渡される。

中には数枚の書類が挟まれており、恐らくこれが今回ここに呼ばれた理由だろうと察することができた。

沈黙が流れる応接室の中で、十分程掛けて書類にざっと目を通すと、顔を上げた蓮は茫然とした様子で加賀を見遣った。

「加賀さん、これは……」
 加賀から大事な話があると言われてここに来たものの、詳細を聞かずにいたことを蓮は心底後悔した。

今しがた受け取った書類には、加賀ホームの経営に関する社外秘の情報がまとめられている。そして一番下の紙面には、加賀ホームの経営権と人事権を蓮に託すという内容の文言が記されていた。

あまりに予想外の事態に、普段はポーカークフェイスを崩さない蓮の表情にも、隠すことのできない戸惑いが浮き彫りになった。

対する加賀は苦笑いを浮かべながら、謝罪の言葉を口にする。

「突然驚かせて、本当に申し訳ないと思う。だけど、こちらもあまり時間が残されていないのでね」

「時間が残されていない？」

混乱する頭でその言葉の意味を考える蓮に、加賀はすぐに答えを提示した。

「実は、私は先が長くない。医者からは、あと半年もたないと言われたよ」

自分の寿命を淡々と語る加賀は、いつもと変わらぬ穏やかな笑みを浮かべている。そのため、蓮は彼の口から発せられた衝撃的事実を、なかなか理解することができなかった。だが、彼の目の奥に宿る真剣な光と、あまりにも胸に重い書類を渡されれば、信じな

いわけにはいかなかった。

「君も知っていると思うが、私には血の繋がった息子が一人いる。だが、アレはともじやないが社を任せられるような人間じゃない。妻や専務の黒田を一時的に社長にした所で、そう長く続けられるものではないだろう。そこで君に協力を願おうと、赤坂君に書類の作成を依頼したんだ」

「俺がこの申し出を断るとは、思わなかったんですか？」

この時、蓮はビジネスの場で使っている「私」という一人称ではなく、あえて「俺」という言葉を使った。相良都市開発の社長としてではなく、相良蓮という一人の男として加賀に向き合いたいと思ったからだ。

蓮の真摯な問いかけに、加賀は笑みを浮かべたまま首を横に振った。

「五分五分より、少しだけ楽観的な展望があると思っっているよ」

穏やかな口調でそう話す加賀はいつもと何ら変わりはなく、これが本当に死に直面した人間なのかと、蓮は信じられない思いで加賀を見つめた。

「大事なので即答はできませんが、詳細をお聞かせ願えますか？」

改めて背筋を伸ばしてそう告げてきた蓮に向け、加賀は目を細めて大きくうなずいた。「君に任せたいのは、私の後任となる代表取締役の選任だ。外部から、君が信頼できると思う者をその任に就けてもらいたい」

「それはうちの社からでも構わないということですか？」

「もちろんだ。私の株は洋子と君に配分されるように、赤坂君に公正証書遺言の作成を頼んでいる。当然君も役員として、加賀ホームの経営に口出しすることができる。ただ現役員や社員らについては、そのまま継続して雇用してもらいたい」

提示された条件は想像以上だと、蓮は言葉を失った。

加賀が蓮に要求する条件よりも、与える報酬の方が遥かに大きい。

そうまでして蓮に加賀ホームの今後を任せる理由が、残された時間の短さによる焦りなのか、それともそこまで信頼されているからなのかは、判断が付かなかった。

「ずいぶんと破格の条件ですね」

戸惑いを正直に口にすれば、加賀はまだこれだけではないと意味深につぶやいた。

「もう一つ、気前のいい話をしよう。君の傍から優秀な人材を加賀ホームにもらい受けるにあたり、うちからも一人、優秀な人材を君のもとへ送り出そうと思っている」

「優秀な人材、ですか？」

「ああ、高城朱里と言えばわかるだろう？」

その名を耳にした瞬間、蓮はびくりと肩を揺らした。

蓮のその反応に、加賀は満足げな表情を見せる。

「……そういうことですか」

加賀のその言葉と表情で、蓮はなぜ自分がこの役に選ばれたのかをようやく悟った。

「あなたが商売敵でなくてよかったと、心底思います」

「ははっ、そう言ってもらえて嬉しいよ」

溜息混じりにつぶやけば、加賀は声を出して笑った。

すべては加賀の綿密な計算の上に計画されたことで、彼の掌の上で転がされていたという事実を知った今、蓮は素直に心情を吐露することしかできなかった。

相良都市開発と加賀ホームは元請けと下請けという関係で協同することはあっても、仕事を取り合うような間柄ではない。

もし競合相手だったとしたら、間違いなく自社の仕事の多くを奪われていたことだろう。

これが長年培ってきた経営手腕の差かと思うと、悔しさ半分、尊敬半分というのが本音だった。

「しかし、彼女がそうやすやすと異動を了承するとは思えません」

「それは問題ない。朱里は、私の遺志を無視するような子じゃないからね」

まるで我が子のことを語る父親のような表情を見せる加賀に、蓮は今さらながら苦いものが胸の奥から込み上げてきた。

なぜこの男が、こんなにも早くこの世を去ることを運命付けられたのか。

誰に向けるでもない、恨み言を口にせずにはいられなかった。

そんな蓮の心情を察してか、加賀は静かに口を開いた。

「遣される者を思い、できる限りのことをして逝くのが死にゆく者の定めだと思えば、私は強運だ。そのための時間が少しでも与えられているのだからね」

男の本気の覚悟を目の当たりにし、蓮はもはや何かを口にするのも無粋ぶすいに思え、提示された書類にしっかりと署名した。

「加賀さん、先程ご相談いただいた内容で今週中に公正証書こうせいせいしょの原案を作成しますが、完成したら奥様にもお見せしますか？」

二人の話し合いがまとまった頃合いを見計らって、それまで黙って見守っていた赤坂が口を開く。

するとその問いかけに、加賀は首を左右に振った。

「いや。洋子は私が決めたことに何も言わずにうなずくだろうから、問題ないよ」

それまで加賀ホームの社長として毅然きぜんとしていた加賀が、妻の名を口にした途端、あつという間に表情を緩めた。

「洋子さんは、このことをご存知なんですか？」

「もちろん私の寿命のことも、私の死後、加賀ホームを相良君に任せるつもりだということも伝えてある」

言いながら、加賀は何かを思い出したように小さく忍び笑いをした。

「あれは強い女だね。私より十歳も若いんだから、私が死んだら好きなように生きなさいと言ったんだ。そしたら、言われなくてもそうするわと返されてしまった」

言葉の裏にある強がりや、長年連れ添った夫を思いやり、決して悲しそうな表情を見せまいとする気遣い。妻のそんなすべてが愛おしいと、加賀の瞳は語っていた。

「食べたい物をたくさん食べて、好きなことをして笑い、残りの人生を十分に楽しんで生きるんだと。そして自分が死ぬ時にはたくさんの自慢話を土産みやげに持って行くから、何も心配せずに待っていてほしいと笑われてしまったよ」

小さな微笑みをこぼしながら、加賀は妻に対する想いを語り始めた。

「残された時間があとわずかだと知った時、一番に考えたのは洋子のことだ。夫の欲目だと笑われるかもしれないが、彼女は美しい。だから、自分が死んだ後は自由に生きてほしいと言ったんだよ」

遠い目をしながらそう話す加賀は、ほんの一瞬だけ寂しげな表情を見せた。

愛しい女に幸せになってほしいという願いと、自分を愛し続けてほしいと思う気持ち。蓮は加賀の表情の中に、そんな葛藤かつとうを垣間見たような気がした。

そして数秒の沈黙の後、加賀は再び笑みを浮かべて話を続けた。

「そう言った時、私はよほど情けない顔をしていたんだろう。洋子は呆れた顔あきをしながら

ら『私の夫は一生あなただけよ』と言ってくれたよ。……私は本当に、いい女に巡り会えた」

一点の曇りなく、妻を愛して逝けることを幸福に思う。洋子に対する愛情をそんな言葉で締めくくると、次いで加賀は朱里の話を切り出した。

「だから、私の心配事は残すところ朱里のことだけなんだ。洋子も私も、あの子を笑の娘のように思っていてね」

そう告げながら、加賀は真つすぐに蓮の瞳を捕らえる。

「正直、会社を任せられる人材は他にもいると思っている。だが、朱里を任せられるのは君だけだ」

確信をもってそう告げられ、蓮は返す言葉が見つからなかった。

真意を探るような目をする蓮に、加賀はその根拠を説明することなく、最後にもう一度懇願する。

「あの子は痛みを知っている分、とても優しい。自分の思いを隠すのも上手い。誰にも頼らずに頑張るのに、誰かに助けを求められれば迷うことなく手を差し伸べる。だからこそ私たちはあの子のことが心配で、何かをしてやりたいと思うんだ」

自分勝手なことをしていると承知の上で朱里を託したいと話す加賀に、蓮は意を決したような面持ちでその瞳を真つすぐに見つめ返した。

「自分にどこまでできるかはわかりませんが、加賀さんの信頼を裏切ることがないよう
に、精一杯努めます」

「ありがとうございます」

礼を述べる加賀の表情に心からの安堵が見え、蓮は託された思いをしつかりと胸の中に刻み込む。

叶うなら、加賀から自分の手に多くを託される日が一分一秒でも先の未来になることを、願わずにはいられなかった。

遠い目をしながら、加賀とのやり取りを思い起こしていた蓮に、赤坂がからかい混じりの言葉を投げ掛けた。

「今さら穩便に話し合おうって言っても、さつきがあれじゃあなあ。いつそのこと、本気で口説いてみれば？ 彼女を落とせば、笑顔でついて来てくれるだろうし」

十二分に笑い転げた後、からかいモードに突入した赤坂に辟易しながら、蓮は再び腕時計に視線を移した。

そろそろ昼休憩が終わる時間だ。

それを確認すると、蓮は空き缶をごみ箱に投げ入れた。

「そんな小細工が通用する女だと思っか？」

吐き捨てるように言い放つと、鞆たばこを手に取り出口に向かって歩き出す。その背に向けて、いまだに意地の悪い笑みを浮かべている赤坂が問いかけた。「通用するなら、彼女を口説くってことでいいのかな?」

「言ってる!」

これ以上言葉遊びを続けるつもりはないと、蓮は足早に休憩室を後にする。そんな蓮の後を追ってきた赤坂は、少しからかい過ぎたか、と言いながら肩をすくめた。役員会で、蓮が普段では考えられないほど朱里に対して強い口調で対応したのは焦りがあったからだ、赤坂はすぐに気が付いたのだろう。けれどそれが加賀の遺志を確実に叶えるためなのか、少しでも早急に彼女を手元に置きたいと、蓮自身が思っているのかなのか。そのどちらなのかまでは赤坂にもわからなかったに違いない。

「厄介な相手に目をつけられて可哀想に」

朱里に同情するような言葉を放ちながらも、赤坂の口元はほころんでいるように見えた。

「まあ、さっきのやり取りを見る限り、大人しく檻かじに閉じ込められているような女性じゃないみたいだし」

今後のことを想像したのか、赤坂はそうつぶやくなり再び声を出して笑い出す。その様子を見て、これ以上相手をするだけ無駄だと判断し、蓮は無言のまま会議室へと向かって行った。

第四話

なぜこのような事態になってしまったのか。

昼休憩の間、おにぎりを一つかじってから、朱里は会議室で一人思い悩んでいた。頭の中で、役員会の終了直後に洋子から言われた言葉を反芻はんすうする。

「朱里ちゃん、あの人のことを許してあげてね。自分がいなくなっただけ、会社のために朱里ちゃんが必死で頑張ってくれてるってわかっている…。でもそれは、あなたにとつての幸せには繋がらないだろうって、ずっと心配していたの」

だからあの規格外のイケメンに自分の今後を託したのだと言われても、朱里はすぐに納得することなんてできなかった。

「あの人のワガママだから、本当に嫌だと思ったらいつでも戻ってきていいのよ」

洋子の優しい言葉に、朱里は力のない笑みを返した。

憤りいらだちは確かにある。

それでも自分が望むかどうかは別として、加賀や洋子が朱里のためを思って出した結

論を恨むほど子供ではなかった。

本音を言えば、加賀ホームを去るのであれば、せめて会社が新社長のもとで順調に動き始めるのを見届けてからにしたい。

少なくとも、今日までは加賀もそれを望んでいると信じて疑わなかった。

だが、その確信はつい先刻、脆くも崩れ去ってしまった。そして自分の異動を決めたのがほかでもなく、父とも慕う男であったことが朱里の選択肢を奪った。

「ここはもう潔く腹をくくるとして……。目下の課題は、あの腹黒社長とどう折り合いをつけるかってことか」

立场上、上から目線は許容範囲だが、挑発的な態度を取られるのは腑に落ちない。

先程の蓮の態度を思い出して怒りが再燃しそうになったところで、タイミンク良くドアをノックする音が聞こえてきた。

「先程の態度については謝罪する。だから、せめてもう少し友好的な態度で接してもらえるとありがたい」

会議室に入り朱里が蓮の向かいの席に腰を下ろすと、彼は苦笑いを浮かべながら開口一番にそう告げた。

直後、蓮の隣に座る赤坂が口元に手を当ててうつむいているのを視界の端に捉える。

それを見て初めて、朱里は自分があからさまにしかめっ面をしていたことに気付いた。

「すみません。ついさっきまで考え事をしていたので」

無意識とはいえ、非礼に一応の謝罪を入れてから大きく息を吐く。

そうして体内の空気をリセットしたことで、朱里は表情を幾分和らいだものへと変えた。

「とりあえず雇用条件と、相良都市開発での私の業務内容をお聞かせいただけますか？」

こうもすんなりと目的の話ができるとは思ってもみなかったのか。

蓮は一瞬拍子抜けしたような表情を浮かべるも、すぐにそれを改めて口を開いた。

「まず待遇についてだが、給料や福利厚生は加賀ホームと遜色はない。詳細の資料は週明け、出社した際に書類を渡す」

テーブルの上で手を組むと、蓮は淡々と話を続けた。

「それから社宅についてだが、今住んでいる所は解約して、うちで指定する場所に引っ越してもらおうことになる。家賃については住宅手当として会社から全額支給されるので個人負担はない」

「それは助かります」

相良都市開発の経営状態を詳しくは知らないが、加賀ホームよりも会社の規模が大きく、順調に事業を拡大していることは耳にしていた。

それでも、このご時世に住宅の賃料を全額支給してくれるというのはなかなかない条件だ。

現在、朱里は個人で契約したアパートに住み、そこを社宅扱いとして加賀ホームから家賃の八割を住宅手当として支給されている。

場所は加賀ホーム本社の最寄り駅から徒歩十分以内という好立地だが、そこから相良都市開発に通勤するためには毎日の通勤ラッシュに耐えなければならなかった。

朱里が言った「助かります」という言葉には、金銭面だけではないその他もろもろの事情が含まれていた。

「では移動する荷物もあまりないので、今月中には社宅に移ります」

「いや、家具家電はすべて揃っているから、今日から住めばいい。引越しについては、明日明後日にも業者を手配しよう」

「はい？」

我が耳を疑うような提案に、朱里は素つ頓狂な声を上げた。

週明けから相良都市開発で働くようにとは言われていたが、まさか引越しまでこうも急かされるとは予想していなかった。

「でしたら、引越しの準備もありますので、今日明日は家に戻って……」
「却下だ」

日曜に引越しますと言おうとした矢先、きっぱりすっぱり否定されてしまった。

理由を問えば、用意した住宅は最新のセキュリティシステムが導入されていて、入居の際には住人登録を済ませる必要があるとのこと。後日一人で行くとすると、身分証明やら何やらと色々面倒な手続きがあるらしい。

それが今日であれば、蓮が同行して身元を保証することで、それらの手続きをさっさと済ませられるということだった。

「はあ……、わかりました」

別に手続きが面倒でも構わないと言おうかとも思ったが、それで言い争いになるのは不毛だと、朱里は早々に妥協した。

加賀ホームに就職してからというものの、家に帰るのはもっぱら入浴と就寝のためのみだった。そのためさほど荷物もないというのが、自分の意見を諦めた理由の一つだった。

「それにしても、家賃全額支給ってすごい破格の条件ですよね？」

「うちでも平社員については八割支給がせいぜいだ。だが上級職に関しては、それなりの待遇をしているつもりだ」

「ん？」

朱里は蓮の言葉に引っかかりを感じて首を捻った。

この人、今何と言った？

確か、平社員は家賃補助が八割だと言ったはずだ。

じゃあ全額支給される私は一体……

頭の中にはなマークが増殖し、朱里は泳がせていた視線の先を再び蓮に定める。

「あの……」

「ちなみに相良都市開発におけるお前の肩書は、情報セキュリティ推進室室長になる」

疑問を口にするよりも早く、回答が得られたまではよかった。しかし、その余りに突拍子もない返しに、朱里は目玉が飛び出すのではないかというくらいに大きく目を見開いた。

「いくら何でも、それは無謀すぎるでしょう!？」

相手が社長だろうが何だろうが関係ないといった勢いで、朱里は思いつきり突っ込んだ。

その直後、赤坂がぶふっと噴き出した様子が目に入る。しかし朱里は、それを一切無視することに決め込んだ。そして蓮に向かって前のめりになりながら、考えを改めるようにと訴えた。

いくら何でも他社から連れてきた社員、しかも元秘書、さらに言えば弱冠二十六歳の女をそんな役職に任命するなんて。そんな無謀な決断に批判が出ないはずがない。

だが、蓮はまったく動じる様子も見せずしれっと返す。

「適材適所だと俺が判断した結果だ。だが、どうしても嫌だと言うのなら、俺の個人秘書でも構わない」

「……室長の方でお願いします」

こんな規格外のイケメン社長の個人秘書になるものなら、社内外のありとあらゆる女性たちから総スカンを食らうこと間違いなし。

あんた、私を殺す気ですか!? と本気で問い詰めたいくらいだ。

またもや選択肢とは名ばかりの項目を並べ立てられて、朱里は早々に白旗を上げた。

「交渉成立だな」

こうなることはお見通しとばかりににやりと笑う蓮に、朱里は内心で「この腹黒めっ!」と罵りつつ、質問を続ける。

「情報セキュリティ推進室とは、具体的にどのような活動をしているんですか?」

「それを決めるのはこれからだ。まあ、うちで管理する個人情報ろうもくの漏洩防止が一番の目的だな」

「へ?」

想定外の答えに目を丸くする朱里に向けて、蓮は腕組みをしながら答えた。

「情報セキュリティ推進室は、新たに立ち上げることになった組織だ。つまり肩書は室長であっても、実質は週明けからお前一人で業務をスタートしてもらうことになる」

「はあ」

どうやらお固いネーミングの割に、部下や仲間は一人もいないらしい。

その事実を知り、朱里はほっと胸を撫で下ろした。

蓮と相談しながら手探りで進めて行くという部分については前途多難と言わざるをえないが、完成された組織に放り込まれて、一から業務を教わるよりは幾分マシだと思える内容だった。

残る疑問は、この男がなぜ加賀ホームで秘書をしていた朱里を、まったく関係ないポストに据えようと思ったのかということだけ。

だが、おそらく自分の過去を洗いざらい調べられたのであるうと思ひ至り、朱里はあえてその疑問を口にしなかった。

そしてその後も話し合いという名の一方的な通達が続けられ――

予想の範疇を超えた用意周到っぷりに、朱里は早々に音を上げた。

目の前で蓮と赤坂が矢継ぎ早に説明する内容を右から左へ聞き流すことで、遠のきそうになる意識を何とか保つ。

そうして三十分程かけて二人が話し終えた頃には、朱里は頭の中で「成るように成る」という言葉を呪文のように唱え続けていた。

「こちらからの話は以上だが、何か聞きたいことはあるか？」

「いえ……」

「だいぶ疲れ果てているみたいだねえ」

同情を滲ませる赤坂に対して、朱里は責任の所在を問いただしたい気持ちだった。

「何て言いますか……、予告ありで誘拐？　される気分です」

朱里が自分の置かれている状況をたとえると、途端に赤坂は噴き出し、蓮は仏頂面になった。

「相手に考える隙を与えずに結論を迫るのは、営業の常套手段の一つだよね、蓮？」

「それって、悪徳セールのやり方じゃないんですか？」

「ははっ、気づいちゃった？」

明らかにこの状況を楽しんでいるようにしか見えない赤坂に、朱里はあからさまに顔を歪めた。

悪徳セールの騙された消費者を助ける側の弁護士が何を言ってもやがると、心の中で突っ込みを入れる。

「人を犯罪者みたいに言うな。自社の社員の生活環境を整え、一刻も早くその能力を発揮してもらうために尽力するのは、俺の仕事の範疇だ」

取って付けたような蓮の言い分に、朱里は反抗する気力を完全に失って深い溜息を吐いた。

「これからすぐに出発する予定なんですよね？」
 先程の説明の中で、一応頭の隅っこに留めておいた内容を聞き返すと、蓮はすぐにならずに返した。

「そうだ。これから用意した社宅に行つて、入居の手続きを済ませる」

「じゃあ、職場の皆に挨拶をしますので、少しの間お待ちいただけますか？」

「それは構わないが……」

いくら何でも、五年も勤めた職場に最低限の礼を済ませる時間くらいは与えてもらえらるだろう。そう思つてお伺いを立てれば、奥歯に物が挟まったような言い方ではあるものの、とりあえずの了承が得られた。

そのことに安堵し、朱里は二人に軽く頭を下げてから会議室の出入り口へと向かう。

しかしドアノブに手を掛ける直前、背後から呼び止める声が聞こえてきた。

「悪いが、もう一つ大事な要件が残っていた。これを今、お前に渡しておきたい」

まだ何かあるのかとうんざりしながら振り返つた朱里は、蓮が放つ重々しい空気に驚いて不機嫌な表情を引つ込めた。

そして差し出された一通の封筒に視線を落とすと、再び彼のもとへと歩み寄つてそれを受け取る。

「中身は何ですか？」

今、小難しい書類を見せられても、頭が疲れ切つていて理解することができないだろう。

そう思つて問いかけてみるも、蓮は厳しい表情で押し黙つたままだ。

自分で確かめろつて言うことですか。

有無を言わさぬ鋭い視線を向けられ、朱里は観念して溜息を吐くと、中に入っていた数枚の紙をまとめて引き抜く。

そして一番上にあつた紙面を見て、朱里は動きをびたりと止めた。

「これ……」

そうつぶやく朱里の指先は、ふるふると小刻みに震えていた。

彼女の手にあるのは、一軒の住宅のデザイン画だ。

色鉛筆で書きされた外観イラストの右下には、加賀のサインが記されていた。

震える手に力を込めて他の紙面を見ると、デザインに対応した間取り図と、A4のレポート用紙に書かれた自分宛の手紙があつた。

「どうして……」

手紙の冒頭に書かれていた「朱里へ」の文字が目に入った瞬間、朱里はきゅつと唇を噛みしめた。

今ここで涙を見せるわけにはいかない。

蓮や赤坂の前でそんな醜態をさらすつもりはないと、ぐつと身体に力を入れてうつむ

くと、不意に傍で人の動く気配を感じた。数秒の後、背後でぱたとドアの閉まる音が聞こえ、朱里ははあつと息を吐いた。どうやら二人は封筒の中身を知っていて、気を利かせてくれたらしい。その気遣いに感謝しながら、朱里は再び加賀からの手紙に視線を落とした。

『朱里へ』

これを手にしている今、君はどんな思いでこの手紙を読んでいるのだろうか。

私が勝手をしたことを、怒っているだろうか。

それとも呆れているかな？

頑固で真面目で、優しい朱里。

私と洋子は、君を本当の娘のように大切に思ってきた。

そんな私たちの娘にたくさんの物を遺していきたかったが、朱里はきつとそれを望まないだろう？

だから私の一番の特技を生かして、最後の贈り物をしようと思う。

朱里、私が洋子に出会えたように、いつか君も誰かを愛し、家庭を持つ日が来たら、こんな家に住んでほしいという願いを込めて、最後にこの夢を贈る。

この家で幸せに満ちて微笑む朱里の姿を想像しながら、最後の仕事を完成させること

ができて、私は幸せだ。

朱里、ありがとう。

幸せになりなさい』

手紙を読み終えた朱里の肩が、小刻みに震え出す。加賀が自分に遺してくれた、温かな想い。それを目にしては、涙を堪えることなどできるはずもなかった。

「こんなの、反則ですよ」

震える声で、精一杯の強がりを入れて独りごちた。

「私はずっと幸せでした。幸せだったんです、社長」

『わかっているよ、朱里』

きつと加賀は穏やかな笑みを浮かべて、そう返してくれたであろう。師であり父でもあった大切な人を失ってしまった現実を強烈に実感し、朱里はその場に崩れ落ちそうになるのを必死で耐えた。

一度しやがみ込んでしまえば、二度と立ち上がれない気がして怖かった。

自分は何も何もしなければいけないのに、死してなおこんなプレゼントを贈る加賀を恨めしく思いながら、ひつくひつくとしやくり上げる。

そうしてしばらくの間、涙を止める術もなく立ち尽くしていると、不意に静かな足音

が背後から聞こえてきた。

段々と近付いてくるそれに、いつの間にか部屋に誰かが入ってきたのだと気付き、朱里は慌てて顔を隠すために入り口に背を向けようとするが――
「えっ？」

小さく声を上げた時にはもう、朱里の全身は大きな温もりにすっぽりと覆われていた。
「ハンカチ代わりだ」

自分の身に何が起こったのかもわからずに茫然^{ぼうぜん}としている朱里に向けて、頭上からぶつきら棒な声が聞こえてくる。

朱里はその声でようやく、自分に温もりを与えている相手があることを知る。

どれだけ高価なハンカチなんだか。

いまだに涙は止まらないのに、朱里は笑い出したくなった。

薄化粧とはいえ、涙に濡れた状態でシャツに顔を押し付けられれば、きつとファンデーションや口紅が移ってしまうだろう。

そのことを気遣って身体を離そうと身じろぐも、蓮は朱里を抱きしめる腕にさらに力を込めてそれを阻止した。

まったく、後で文句を言われたって聞かないんだから。

胸の中で悪態をつきながら、朱里は与えられる温もりの心地よさにすべての思考を手

放す。

身体のを抜いて蓮の胸に顔を預けると、涙が止まるまでの間、朱里は存分に高級ハンカチの恩恵にあずかった。

そうしてひとしきり泣いて気持ちが悪く落ち着くと、徐々に羞恥心^{しょうちしん}が込み上げてきた。

上質そうなドビーストライプの白シャツは涙で無残にもぐつしよりと濡れていて、心配した通り、ファンデーションの色が移ってしまった。

それもこれも強引に抱き寄せた蓮のせいだと割り切ることもできたが、本当にそれを着て帰るのかと思えば申し訳なきが込み上げてくる。朱里は居た堪^{たまた}れない気持ちを抱えながら、そっと蓮の胸から身を引いた。

すると今度は強引に抱きすくめられることもなく、腰と背中に添えられていた大きな手がすんなりと離された。

「シャツ、汚してしまってますみません。それと、ありがとうございます」

真っ赤に染まった目に鼻声という、何とも格好のつかない状況ではあったが、朱里は素直に礼を述べる。

すると感謝の言葉を受け取った蓮は、ふんわりとした笑みを浮かべた。

この人、こんな風に笑うんだ。

失礼だが、今まで蓮に独裁者のイメージしか持っていなかった朱里は、その表情に内

心驚いた。

見方を変えれば、この男にも少しは可愛げというものがあるのだろうか。

そう認識を改めようとした直後——そんな考えを吹き飛ばすかのように、蓮の表情が黒い笑みに切り替わった。

「いや、こういうのは役得と言うんだらうからな。札を言うべきはこちらだらう？」

規格外のイケメンが口にしたエロ親父発言に、顔と言葉の中身の釣り合いが取れなさすぎていて、朱里は思わずぷつと噴き出した。

思いつきり泣いて、思いつきり笑う。

感情を素直に表に出すことを久しく忘れていた朱里は、晴れやかな気持ちで顔を上げた。

第五話

「相良社長、加賀ホームのことをどうぞよろしくお願いします」

加賀ホームの本社ビルを出て、その佇まいを並んで見上げていた時——

二人の間に流れていた沈黙を破り、朱里は隣にいる蓮に向かって深々と頭を下げた。

会議室で思いきり泣いた後、化粧を直した朱里は職場の仲間たちのもとへと挨拶に出向いた。

すると、すでに朱里が加賀ホームを去るという話は広まっていたようで、事務所に足を踏み入れると同時に社員たちに囲まれてしまった。

そして皆口々に「寂しくなるなあ」とか、「嫌になつたら帰つてこいよ」とか、朱里の頭や身体を撫で回しながら別れを惜しんでくれたのだが——

おい、今どさくさに紛れて胸とお尻を触つた奴、出てこいや！

何度もそう叫びたくなるような状況もあり、残念ながら感動の別れとはいかなかった。湿っぽい別れを嫌ってわざとそうしたこと、皆が心から寂しがってくれていることも正しく理解していた朱里は、頬を引きつらせながらも終始笑顔を見せた。

ただ一つ、西野の本気の男泣きにはドン引きしたのだが……

とはいえ加賀がいなくなってしまう今も、加賀ホームは自分にとって大切な場所に変わりないのだと、再認識することができた。

自分は社を去る身だが、新天地で加賀や皆に恥じることがないように頑張ろう。

そんな決意を胸に、朱里は自分にとって居心地がよかった場所との別れの儀式として、蓮に頭を下げたのだった。

「お前達が敬愛する加賀社長が俺を指名したんだ。信じる」

朱里が口にした心からの願いに、蓮は穏やかな口調で答え、ぐりぐりっと朱里の髪を掻き混ぜた。

おそらく、蓮の能力を疑ったの発言ではないと気付いたのだろうか。

そう、朱里はただ託しなかったのだ。

自己満足でしかない言葉をしつかりと受け取ってくれた蓮にうなずき返し、朱里は五年間勤めた会社に再び一礼する。

そして迷いを捨てて顔を上げると、加賀ホームに背を向けて先を歩き始めた蓮の後を追った。

これから私が支えるべきは、この背中か。

男性にしては線が細い方だと思っていたが、意外にもその背中中は広く見えて、朱里は足早に蓮との距離を詰める。

すると道路脇に待機させていた黒のセタンに乗り込む直前に、蓮がうしろを振り返った。

振り向き様に彼が見せた穏やかな笑みは王子さながらで、思わず朱里はどきっと胸を弾ませる。しかし、そのことは決して誰にもばれないように墓場まで持つて行こうと、密やかに決意した。

一方蓮はというと、朱里がそんなことを考えているなどとは露も思わず、真顔のまま

爆弾発言を口にした。

「あの加賀社長にこれだけ評価され、大切に思われていたんだ。高城朱里、お前はいい女だな」

以前、加賀が妻の洋子をそう称していたのを思い出しながら、朱里をまじまじと見て言い放つ。

それを彼が言うのと世の女性にとってどれだけの攻撃力となるのか、当の本人はまったく自覚していないところが罪深い。

その威力たるや、手榴弾しゅりゅうだんどころではなく核爆弾級だ。

だが、何が何でもこの男にたらし込まれるわけにはいかないと、朱里は鉄壁の自制心でもってその攻撃を耐え抜いた。

それでも、湧き上がってくる、えも言われぬ感情を完全に押し止めることはできず……

「このたらしがっ！」
腹いせに叫んだ声は思いの他大きかったらしく、先に車に乗り込んでいた赤坂とお抱えの運転手は揃って爆笑していた。

「いやあ、『たらし』はよかったねえ」

車に乗り込んでから数分後。